

高等専門学校の英語授業における英会話指導実践例（一）

——実践的英会話能力の養成を目指した二つの試み——

山 崎 健 一*

Some methods of enhancing students' speaking skills in English classes at NIT, Nagano College
—Aiming at improving the students' practical skills in English communication—

YAMAZAKI Ken'ichi

There have been a lot of discussions about how to improve the students' English communication skills in Japan. This paper is a report based on results of some new trial practices conducted in English classes and on a questionnaire survey made after the classes. Two methods were adopted for the 4th year students. One was 2-minute speaking, and the other was Talk Show. Both practices were carried out as pair works. According to the results of the questionnaire survey, the students were motivated by, and satisfied with the two practices. On the other hand, these trial activities failed to attract half of the students' interest in English conversation. These ways of practice seem highly effective, however, there are some points to be improved.

キーワード：英会話，スピーチ，ロールプレイ

1. 英会話指導の背景と本論の概要

高等専門学校における英会話指導の必要性に対する認識としては、年々その強さを増していることは周知の事実である。インターネット通信による英会話教室など学生個人による英会話練習の機会は数年前に比べて飛躍的に増えている。また、国際化が進むにつれ、学生が外国人と接することも多くなってきている。とはいえ、高専の英語授業はいまだ文法や読解のみを重視したものになりがちである。それらの伝統的学習内容が必須のものであることは、時代が移り変わっても変化することはないだろう。しかし、多くの学生にとって最も長い間英語に接する機会となる英語の授業において英会話の指導がなされないという事態は、英会話重視の社会情勢を考慮に入れると、避けるべきであると思われる。筆者は主に専攻科においてすべて英語で行う授業を実施するなどしてきたが、2016 年度より本科の授業の一部の時間において英会話の練習を採用した。本論考はその英

会話指導に関する報告書と言えるものであるが、主な内容は、まず指導実践例の内容、その後実施されたアンケート結果の紹介、そしてそのアンケート結果の分析である。

2. 会話指導実践内容とアンケートの概要

今回紹介する英会話指導に関する概要は **Table 1** の通りである。練習内容第一の「2 分間スピーキング」は、与えられた題目に関して自由に 2 分間英語で話すというものである。本アクティビティーはペアワークであるため、一人が発話してパートナーは聞くのみという状態になることが多い。しかし、2 分話している間はパートナーが質問することは特に妨げられない。一方的な発話だけ

Table 1

対象学生：本科 4 年生
学生数：40 名
アンケート回答学生数：36 名
授業時間：90 分、年間 30 回
会話活動回数：年間 15 回
練習方法：学生のペアワーク
練習内容：「2 分間スピーキング」、「トークショー」

* 一般科准教授

でなく、聞き手が途中で質問をすることもあり、時に活発な対話になることもある。

もう一つ授業中に行った会話活動であるトークショーは、所謂ロールプレイの一種である。舞台設定としては、ペアのうち一人がテレビやラジオのトーク番組の司会者の役を演じ、もう一方の学生がゲスト役を演じるというものである。ゲスト役の学生は、まず自分が演じる職業を選択し決定する。その後、準備時間なしで、司会者役の学生の進行で会話をする。司会者役の学生には質問英文のプリントが渡され、学生はそこにある質問文をそのまま、あるいは少し変えながら読み、相手役の学生はその質問に即興で答える。以上が二つのアクティビティの概要である。

また、すべての授業終了後に実施したアンケートの質問項目は **Table 2** の通りである。

3. 高専学生の英会話訓練等の現状について

アンケートでは、学生の現状について二つの質問をした。結果は **Table 3** の通りである。予想通りではあるが、「少ししている」と回答した学生が実際にそれほど練習していないとすれば、大方の学生が英会話練習をほとんどしていないと言える。

一方、アンケートには **Table 4** のような英会話の能力に関する質問もあった。大木(2015)によれば、様々な調査の結果、高等学校の生徒及び高等専門学校学生は、「書く」や「読む」のような技能よりも英会話の技能を必要としている場合が多い。¹⁾ 本校における今回のアンケートでも同様に、英会話の能力の必要性は多くの学生が感じていると言える。

これら二つの結果から、高専生は英会話能力の必要性を十分認識しながらも練習の機会を持っていないということが言える。英会話能力の必要性に関する認識と現状との隔たりは、堀内(2016)が大学一年生に行ったアンケート結果でも見られる。²⁾ 急速に国際化が進む現代社会において高い英語力、特に日本人の場合は英会話力を身に着けることはもはや必須のことと言える。社会と学生のニーズにこたえるためにも、高専の英語の授業において英会話指導を行うことが必要不可欠であることは明白である。

4. 2 分間スピーキングについて

本授業で行った2分間スピーキングで取り扱ったトピックは **Table 5** の通りである。筆者はほかの学年の授業でも同様の2分間スピーキングを採用しているが、その際最も重要なことは、いかに学生が話しやすいトピックを教員が設定するかということである。とはいえ、高専生にとって英語で話しやすいトピックを探すことは極

Table 2

「授業での英会話練習は役に立ちましたか」
「現在自分で英会話の練習等をしていますか」
「英会話の能力は必要だと思いますか」
「会話活動をして、英会話能力は伸びましたか」
「練習後、英会話に対する興味に変化はありますか」
「2分という練習時間はどうですか」
「これからも同じような会話活動を授業中に行いたいですか」
「上の質問の理由を書いてください（自由記述）」
「Talk Show の際にどのような職業、人物を選びましたか（自由記述）」
「今後授業中にどのような英会話活動をしたいと思いますか（自由記述）」

Table 3

「現在自分で英会話の練習等をしていますか」
全くしていない 29名
少ししている 5名
している 2名

Table 4

「英会話の能力は必要だと思いますか」
かなり思う 11名
思う 23名
どちらとも思わない 2名

Table 5

1. What did you do last weekend?
2. Pick up one person around you and tell me something about the person.
3. Take one thing out of your bag and tell me something about that.
4. Tell me something about your favorite smartphone app.
5. Tell me one of your bad habits that you want to break.
6. Have you changed since you were in junior high?
7. What should Kosen students do more?

Table 6

1. What do you want to do after the summer vacation?
2. How many friends have you got since April?
3. When you were a little child, what did want to be in the future?

めて難しい。**Table 6** は、授業や学生との会話練習で実際に使用したトピックの例である。結論から言えば、以

上のものはすべて失敗であった。一見学生にとって話しやすい話題であるが、2分の間これらについて英語で話し続けることは容易ではない。1から3のトピックの難易度が高い理由はいくつか考えられるが、1については、曖昧さがあげられる。まず時間的要素として、「夏休み後」というのはあまりに漠然としている。夏休み後からどこまでの期間のことを指すのか、そして何について話したらいいのか、明らかになっていない。2の場合、新しい友人の数を答えるのみで、その後の発話が続かない場合が多かった。このような、数字や時間だけを問う質問は、その数字の答えから会話を発展させることが難しく、その後に発話の手助けになるような視点を追加すべきである。具体的には**Table 7**のようなものがあげられる。

Table 6の3の質問の問題点は、時間的に遠すぎるということである。英会話初心者が困難と感じる状況の一つに、話すことがないというものがあげられる。母国語である日本語を用いての会話においても同様であるが、幼い子供の時になりたかった職業について記憶していること自体なかなか難しいことであるし、その仕事にそこが理由などはなおさらである。自分になりたい職業という内容で会話をさせるのであれば、現在学生が考えている職業の方がより話しやすくなるであろう。2分間スピーキングでは、教員の指導能力よりもテーマ設定の方がより重要である。Warner(2016)も、教室での英会話活動を盛んなものにす要素として、発話の機会の次、つまり実質的に第一に、「学生にとって話しやすいトピック」を挙げている。³⁾

5. トークショーについて

トークショーのアクティビティーでは、司会者役の学生のために模範のひな型を作成し、それを配布したうえで練習をさせた。司会者役の学生が用意されたひな型を読むだけでは練習としては不十分であるため、司会者役の学生には、「I think in your job, you have to ~ very hard. Do you do that?」という質問を用意し、即興で空欄を埋めて質問させる練習もさせた。用意した司会者用スクリプトは**Table 8**にある通りである。当初は何らかの準備時間が必要かと考えたが、ゲスト役の職業を考える時間を取ったのみで、準備の必要はなかった。学生の反応は思った以上によく、2分では時間が足りず、すべての質問を消化するには、最低でも5分はかかっていた。ゲスト役の職業は、最初のうちは「教師」や「医者」など、一般的によく知られた職業が選ばれていたが、アンケートの結果、数回行った後では学生の興味ある様々な職業が選ばれていたようである。

英会話練習の授業でディベートがしばしば用いられ

Table 7

How to get friends.
The best friend among them.
Difference between a friend and a best friend.
What to do with friends.

Table 8

Hello everyone, I'm ~, the host / hostess of this talk show.
Today's guest is ~. He / She is a ~. Let's ask many questions about his / her job.
Hi ~. Thank you for joining us today.
First of all, you are a ~, when, and why did you decide to become ~?
Did you work / study hard to get your job? What did you need to do?
What is the most interesting point about your job?
When do you feel the worst in your job?
I think in your job, you have to ~ very hard. Do you do that?
Have you ever thought of quitting your job?
Why?
Please give advice to young people. If they want to become ~, what do they need to do?
Thank you ~ for joining us today.

る。もちろんディベートの教育的効果は疑いないが、即興型と言われるパラメンタリーディベートの場合でも、テーマ発表から開始時刻まで20分程度あり、準備が許される場合がほとんどである。また、当然テーマは政治や経済など専門性の高いもので、学生はあらかじめ予備知識を習得したうえで臨まなければならない。通常の授業中に頻繁に行うには、あまりにも時間と労力がかかりすぎる。一方トークショーのアクティビティーは、自分の真意とは異なる主張を英語で行うという、ディベートの利点を活用しつつ、短時間で手軽に行うことができる。また、内容も簡単な返答で、それぞれが自ら選んだ職業について語るため、より楽しむことができる。本アクティビティーは、所謂ロールプレイよりもSchellin(2007)らの主張するシミュレーションに近いものと言える。すなわち、「レストランでの会話」や「電話のやり取り」のような通常のロールプレイよりも、より会話が活発になり、発話者が自ら考えるようになるような会話活動である。⁴⁾

トークショーアクティビティーは後期学期に入ってから職業の他に歴史上の人物など、ある特定の人物を選ぶことも可とした。**Table 9**は、学生がどのような職業や人物を選んだかというアンケート結果の一部で、複数名の回答のあった人物のリストである。その他、一名

のみであったが、ポケモンマスターや石油王、あるいはゲーマーなど、どちらかというとなりとも娯楽性の高いものが多い。つか見られた。教員側がトークショーのような活動時に選択する職業や人物はまじめなものであるが、学生にとっては面白みに欠けることが多い。しかしながら、学生が考え付くものの中には極めて話しやすく、また楽しみながら会話練習のできるものが多い。学生に自分が担当する職業を選ばせたりすることや、楽しめる教材を用意することは、彼らがより発話しやすい教室の状態を生み出している。これらのことは、Roberge(2011)の言う、学生中心で、話しやすい雰囲気のある授業環境づくりに貢献していると思われる。⁵⁾

基本的な文法事項や語彙の多くをすでに習得している日本人学生に英語での発話を促す際、最も重要なのは話すテーマであるが、年齢も価値観も全く違う教員が学生のために用意するテーマよりも、学生自身が選んだ方が効果的であることは稀ではない。特にこのような固有名詞に近いもの場合は有効であり、学生の選んだ職業は非常に参考になった。

6. 授業中の会話練習についての学生の感想

では、これらの会話練習活動について学生はどのように感じているのだろうか。アンケートでは、まず2分という発話時間の妥当性について聞いた。結果はTable 10の通りである。ちょうどよいという回答が多いということは予想できたが、短いという回答が8名いたことは意外であった。前述したように、当該クラスの学生は現在英会話の練習を自主的には行っておらず、長期の留学経験もない。英会話練習の積み重ねがない学生が、4年生になって授業中に何の準備もなく英会話練習をして、2分を短く感じることは、教員側の考えとは全く異なる。厳密な理由は不明であるが、一般的に考えられるほど、学生の英会話に対する拒否反応は強くないように思われる。本アンケートには、Table 11にあるような学生の英会話に対する姿勢を問う質問もある。ここでは、75パーセントの学生が今後も授業での英会話の練習を望んでいる。大味(2014)も、英会話授業の学生間の満足度について、自らのアンケート結果をもとに論じている。学生の間では、英会話練習はおおむね好評といえる。⁶⁾ この質問には、自由記述で今後の英会話活動についての判断の理由を聞く箇所もあった。Table 12において、会話練習に肯定的な意見のうちいくつかを紹介する。単に楽しいという回答は4名にとどまり、英会話能力の必要性を意識した回答が15名となった。15名という数字は小さいが、自由記述の欄に自ら英会話能力の必要性について書いていること、また、別の学年のアンケートでもこれからも英会話活動をしたいという回答が多いこと

Table 9

エンジニア	8名
教師	6名
スポーツ選手	6名
調理人	5名
アーティスト	3名
花屋	3名
警察官	3名
ジャムおじさん	2名
奇術師	2名
医者	2名
パイロット	2名
アンパンマン	2名

Table 10

「2分という練習時間はどうですか」	
長い	8名
ちょうどよい	20名
短い	8名

Table 11

「これからも同じような英会話活動をしたいですか」	
かなりしたい	8名
したい	19名
どちらでもない	8名
したくない	1名

Table 12

旅行や仕事で使うことを考えると英語を話せるようになりたいから。	8名
楽しいので。	4名
練習することが必要であるから。	4名
自分の英会話力不足を実感したから。	3名

を考えると、教員が考えるよりも学生の英会話に対する需要は強く、適切な教材と環境を与えられれば、多くの学生が真面目に取り組むと予想することは、それほど間違ったことではないように思われる。

大木(2015)独自の調査によれば、高等学校の生徒が英会話に興味を持つ大きな理由は、「英語が話せれば多くの人とコミュニケーションをとることができるから」という『国際交流志向』や、「外国人に道案内をしたいから」という『国際化対応』によるものである。⁷⁾ 一方で本校4年生の場合は就職に役立つなど、より将来のことを視野に入れた結果となっている。

本授業で採用した2分間スピーキングとトークショー

という二つのアクティビティーは、学生の多くにとっては好評であったが、アンケートには別の興味深い質問がある。「練習後、英会話に対する興味に変化がありますか」というものであるが、結果は **Table 13** の通りである。英語に限らず語学の習得には学習者の興味の強さが重要な要素の一つであるが、本授業での英会話活動では、学生の英会話に対する興味を大きくかき立てるまでには至らなかった。学生は、英会話の必要性を実感したのみ、ということが言えるかもしれない。語学習得にはもう一つ、楽しむという要素もあり、今後この二つの点についてさらに効果的な会話練習法を検討する必要がある。

7. 会話練習後の学生の英語力

最後に、二つのアクティビティーは学生の英会話能力の向上に効果があったのだろうか。 **Table 14** のように、この点に関するアンケートの項目は二つあり、ひとつが「授業での英会話練習は役に立ちましたか」で、もう一つが「会話活動をして、英会話能力は伸びましたか」というものであった。 **Table 14** の結果を簡潔にまとめると、少しは役に立ったが英会話力は有効に伸びたとは言えない、ということになるであろうか。他の自由記述欄にもあったが、今回の活動を通して会話の重要性や難しさを実感できたという点で、役に立ったと思われる。一方会話能力そのものは劇的には改善されなかったが、10分程度の練習を年間15回程度行っただけという現状を踏まえると、これら二つの成果は決して低く評価されるべきものではないと思われる。このような英会話活動を高専の一学年時から取り入れ、数年にわたって実施した場合、さらに有効な練習法となるであろう。

8. 今後の課題

平成29年度4月現在、2年生対象に2分間スピーキングを継続して行っている。今後の課題としては、話すテーマを精選することの他に、学生の発話のレベルを向上させる指導をするということであろう。これまでは、とにかく英語でコミュニケーションをとるということを中心にしていたが、それに加えて、より正確に、より表現豊かに話すということも当然必要である。それには、教科書で学習した構文や表現を例文として提示し、会話の中で活用させることも必要である。また、極端に発話の困難な学生も多くいることから、本年度は2分間スピーキングの前に多くの参考例文を示し、さらにノートに発話内容を書くなど準備をさせたうえで会話練習を行っている。

また、ペアの一方の学生のみが発話している場合、それは通常の会話とは言えない。パートナーが相手の発話

Table 13

「練習後、英会話に対する興味に変化がありますか」
かなり興味がわいた 2名
興味がわいた 17名
変化なし 17名

Table 14

役に立った 11名
少し役に立った 20名
どちらともいえない 4名
役に立たなかった 1名
かなり伸びた 1名
伸びた 4名
どちらかというと伸びた 21名
変化なし 10名

Table 15

1. You said that ~, does this mean ~?
2. Your story about ~ was really interesting, could you tell me more about that?

中に質問をして会話を成立させるのが理想的であるが、相手の話の途中で質問を挟むことは、特に英語を用いての会話の場合、学生にとってはかなり難易度の高いものである。そのため、質問を効果的に引き出せるような支援も試験的に行っている。教室で20組のペアが行っている会話内容を把握することは不可能であるので、教員がそれぞれの会話にふさわしい質問を指示することはできない。しかしながら、会話の様々な局面に有効な質問の基本的な表現を示すことはできる。とはいえ、所謂5W1Hのみを指導したのでは、学生がそれらを質問の形で会話中に用いることはなかなか難しい。本活動で提示しているのは、もう少し応用のきく質問である。例えば **Table 15** のようなものがあげられる。両方とも、質問の形式であるが、パートナーの発話内容とは関係のない質問である。しかし、実際に学生に会話中で用いるように指導すると、その後の会話が活発に続くようになる。1は比較的初學者でも活用できる。パートナーの発話内容を繰り返し、それを少しだけ変化させ、内容を確認するものである。

2は全く応用の必要のない質問である。聞き手は発話者の話の一点を繰り返し、それについてさらに語るよう促すだけである。簡単な質問とはいえ、この質問は、聞き手が発話者の話すテーマに興味を持っていることを明らかにしており、また発話者は一度語ったことを再び、できるだけ詳細にまた具体的に述べればよいだけである。この質問により、それほど苦勞することなく会話時

間を延長することができる。

冒頭で述べたように、インターネット通信を利用した英会話指導産業は現在ますます盛んになっている。また、学生が海外渡航をする機会も、以前とは比較できないほど増加している。様々な面においてグローバル化が急速に進んでいく英語教育の世界において、あえて「授業中」に英会話指導をする意義はあるのか。今まで筆者が行ってきたような、単に発話させるだけの指導に加え、上述したような、さらに会話を表現豊かに持続させるような指導法を見出すことが、今後一層必要になると思われる。

注

1) 大木俊英(2015). 「テキストマイニングを用いた高校生英語学習者のニーズ分析：大学受験予定者と非予定者の比較」 『白鳳大学論集』第29巻. 第1・2合併号.

195-197 頁.

2) 堀内ちとせ(2016). 「実践報告「英語での発話」を促すために」 *Language & literature (Japan)* 愛知淑徳大学大学院英文学専攻 (編) 第25号. 54-64 頁.

3) Ian William Warner(2016). 'English Language Speaking / Oral Communication Lessons: Inhibiting Factors and Practical Solutions' 『吉備国際大学研究紀要 (人文・社会科学系)』第26号. 157 頁.

4) Keith A. Schellin(2007). 'Simulation, Role Play and Drama in a Communicative Classroom' 『山脇学園短期大学紀要』第44巻. 17 頁.

5) Luc Roberge(2011). 'Effective Use of the Communicative Approach in English : Conversation Classes in a Japanese college' 『長崎短期大学研究紀要』第23巻. 54 頁.

6) 大味潤(2014). 「異文化適応を目的とした ESL クラスの授業内活動とその有効性の質的検証」 『尚美学園大学総合政策論集』第19巻. 74 頁.

7) 大木俊英(2015). 208 頁.